

# 教職大学院 News Letter

**第2号**

2016.9.30

Since 2016

**協創****中間報告会特集**

## 教職大学院の設置に寄せて

### 教職大学院への期待

**新潟県教育委員会教育長 池田 幸博**

日頃より、新潟県教育の充実・発展に向け、ご理解・ご協力をいただき、感謝申し上げます。

新潟大学教職大学院が、確かな理論と優れた実践的能力を備えたスクールリーダー、学校づくりの有力なリーダーとなり得る指導力・展開力を備えた新人教員の養成を通して、地域及び学校の教育力の向上に貢献いただい

ていることに、心から敬意を表します。

新潟県が派遣する現職教員院生は、自校の学校課題と向き合い、理論と実践の緊密な往還を図りながら、地域に密着した教育課題の解決に向け、豊かな学びを創造しております。

これらの学びの蓄積が、本県教育の向上に大いに貢献するものと確信し、新潟大学教職大学院に、大きな期待を寄せております。

今後も、教育委員会と新潟大学教職大学院との連携・協働をもとに、学ぶ意欲をもつ教員を支援いただくとともに、当県の教員の資質向上及び教育の発展にお力を賜りますようよろしくお願いいたします。

### 新潟大学教職大学院 と新潟市教育委員会 との互恵的關係

**新潟市教育委員会教育長 前田 秀子**

新潟大学教職大学院の発足から約半年が経過し、順調に教育活動が進んでいることに、心よりお喜び申し上げます。新潟市教育委員会は、新潟大学教職大学院に大いなる期待を寄せているところです。

教職大学院の役割は、主に、「教員養成」と「教員研修（現職教員の再教育）」の二つと認識しています。そして、新潟大学が位置する本市といたしましては、この二つの役割が果たされることにより、大きな恩恵がもたらされると考えています。それは、教職大学院で資質能力

を高めた修了生が新潟市の教員として採用され、その実力を発揮することと、現職教員が教職大学院で学び直し、専門性を高めて帰ってくることにより、本市の教育の質がますます高まるという恩恵です。

また、今年度、新潟市内の小・中学校3校が特定連携協力校となり、教職大学院の必修授業がその一教室で行われています。特定連携協力校が直面する現実を対象とすることで、教職大学院での学びがより実践的になるとともに、特定連携協力校にとっても、課題解決や改善向上に向けた示唆を受けることができます。両者にとって意義ある教育活動が実践されていることに価値を感じています。

全国的にも先進的な取組を進めている新潟大学教職大学院との連携・協力を進め、お互いに教育を充実させていきたいと思っています。



## 中間報告会プログラム 8月19日

## ～院生による学びの報告～

## 【午前】全体会・シンポジウム

- 10:15 開会の挨拶
- 10:25 教職大学院での学びの流れについての説明
- 11:00 シンポジウム  
「現場を拠点とした学びのあり方とその深まりの探究」

## 【午後】分科会

- 13:30 院生のポスターセッション
- 14:40 ラウンドテーブル

※ポスターセッション及びラウンドテーブルは、以下の4会場に分かれて行いました。

- ① 授業力                      ② 学級経営
- ③ 特別支援                  ④ 学校経営

## 高橋姿学長挨拶 (要旨)



「自律と創生」を全学の理念に掲げている本学において、これからの教育を考えると、「より確かな実践力を有する新人教員、地域や学校において指導的な役割を担う教員の育成」を担う教職大学院の責務は重要であり、同時に大きな期待を寄せているところです。

これからの世界のグローバル化や知識基盤社会に対応するには、より良質な教育が必須です。高等教育を経て、高度専門職業人や最先端の研究者として活躍する人も、初等中等教育の基礎があってこそその結果です。その教育の根幹である初等中等教育のリーダー的教員を育成するのが教職大学院です。

世界は今、日本の初等中等教育を大きく評価し、取り入れようとしています。見習うとは、追いつき追い越せということです。私たちは、常に先端を走らなければなりません。日本の、そして世界のモデルとなる教員養成体系の教職大学院を新潟に作っていただきたいと願っています。本日の中間報告会を経て反省点を的確に把握し、至らない点を改善し、よい点はさらに伸ばし、発展し続けていくことを、学長として祈念しています。

## 小久保美子専攻長挨拶 (要旨)



今、学習指導要領の改訂の最中にありますが、そこでのキーワードは、「アクティブ・ラーニング」です。教職大学院の授業は、まさしくアクティブ・ラーニングで、コースの異なる院生と教員とが同じテーブルを囲み、ディスカッションを積み重ねてきました。私自身、長い教員生活の中で、こんなにも熱く、教育について情熱的に議論し合うのは初めてではないかと思えます。立場や年齢の異なる院生どうしがチームとなって学ぶ姿に、「協働性を培う」というアクティブ・ラーニングの真髄を見たように思い、大変うれしく思っております。

「チーム学校」とも言われますが、大学院で身に付ける最も大きな資質能力の一つは、チームに貢献する力、チームを作る力・牽引する力ではないかと思えます。大学院の授業や協力校での実習等を通して、これらの力を身に付けていくものと期待しています。

4月20日の上所小学校での最初の授業の折り、新潟市教育委員会の山田浩之先生がご挨拶され、「立ち上げの時期は、一度きりです。作り上げる喜びを味わってください。」とおっしゃってくださいました。この言葉を胸に、誇りと喜びを持って教職大学院の充実発展に尽くして参りたいと存じます。

## シンポジウム

テーマ：「現場を拠点とした学びのあり方とその深まりの探究」

## 【進行 一柳智紀】

院生は、在籍校で実習し、そこに大学教員が行き、実習や課題研究を行います。これは、当教職大学院の特色の一つであり、理論と実践の往還を目指したものです。

そこでの学びについて、連携協力校である新潟市立松野尾小学校長の本間アユ子氏と在籍院生の鈴木綾子、特定連携協力校である新潟市立浜浦小学校在籍院生の藤塚静治とそこに配属されている学部新卒院生三條奏子、そして、両校の担当である当大学院専任教員の高橋雄一が話題提供を行いました。

松野尾小（連携協力校）の話題提供

【本間校長】：週2回在籍校で学んでいることを生かし、学びの場に職員を同席させたり、研修会を開いたりして、教職大学院の学びを職員に還元しています。また、院生が授業をした際には、保護者にも案内を出し、参観する機会を設けるようにしました。

【鈴木院生】：校長から「遠慮せずにどんどん先生方や児童と関わりなさい」と言っていただいたこと、全校朝会で大学院での学びを紹介する機会をいただいたことで、勤務している職員や児童と深く関わることができています。

浜浦小（特定連携協力校）の話題提供

【藤塚院生】：学級担任をしながら大学院で学ぶこと・学校経営コースで学ぶことが、学校課題とどう関連づけられるか考え、自身の課題研究を続けています。

【三條院生】：学部新卒院生として週2回浜浦小で児童と関わる機会を持ちながら学び、大きな気づきを得ています。そして、学校経営コースの藤塚院生とともに学ぶことで多角的な視野を持つことができます。

このような学びが紹介された後、これらを受けて、専任教員の高橋が大学側の立場から「在籍校での学びと院生の課題との関係」について補足説明を行いました。

次に、新潟県教育委員会管理主事の今井渉氏及び新潟市教育委員会管理主事の山田浩之氏から上記の話題に対するコメントや激励、期待のお言葉をいただきました。これらを統括して、専任教員の相庭和彦が意見を述べ、最後に、フロアとの意見交換を行いました。

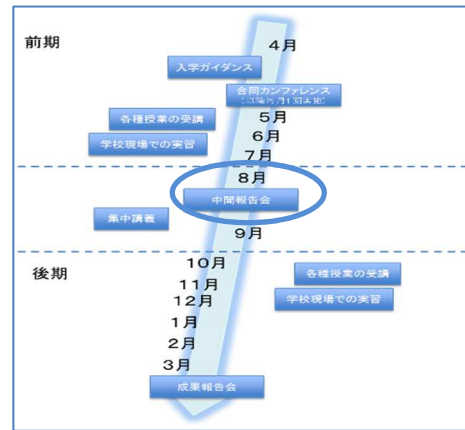
※ 用語注釈「特定連携協力校」「連携協力校」

「特定連携協力校」：勤務しながら学ぶ現職教員が在籍する学校で、必修科目と課題研究の授業及び実習が行われる。今年度は、学部新卒院生の実習も週2日ここで行われている。  
「連携協力校」：派遣の現職教員院生が在籍する学校で、週2日の実習及び課題研究の授業が行われる。

「学びで視野広がった」  
新大教職大学院 教員ら中間報告会  
新大が4月に設置した教職大学院の中間報告会が19日、新潟市西区の五十嵐キーンバスで開かれた。教職大学院では、学校が抱える課題に対応できる専門性を持った教員を養成しようとする。3人は通常の授業では週2回の実習を自分の学校で行えるのが特徴だ。1期生19人のうち13人が現職教員で、3人は通常の授業では週2回の実習を自分の学校で行えるのが特徴だ。1期生19人のうち13人が現職教員で、3人は通常の授業では週2回の実習を自分の学校で行えるのが特徴だ。

8月20日  
新潟日報  
記事

ポスターセッション



中間報告会は各自の半期にわたる学びと教育実践を広く学外に公開し、皆様からの貴重なご意見を通して省察を行うことを目的に、実習科目の一環として開催されるものです。

17名の院生が、各自の課題の下に、学びの履歴と研究の進捗状況をポスターにまとめ、次の4つの会場に分かれて発表しました。

- ① 授業力
- ② 学級経営
- ③ 特別支援
- ④ 学校経営

右は、そのうちのひとつで、小針中学校金田良哉院生のもの。

「教師の自己開示と聞き手の反応」を課題として研究している内容をまとめたものです。



下の写真は、ポスターセッションの場面です。沼垂小学校の齋藤潤次院生が、『主体的で共同的な学びの中で「分かる」と「できる」を深める授業』というテーマで研究していることを発表しています。



院生の在籍校の管理職や職員が参加してくださったセッションもあり、鋭い質問や疑問点が提示され、今後につながる知見を得ながら多くの方の支えの中で学んでいることを実感できた中間報告会となりました。

## ラウンドテーブル

ポスターセッションに引き続いて行われたラウンドテーブルでは、研究内容についての質疑応答や、参会者の勤務校での実践紹介など、活発な意見交換がなされました。



この写真は、学校経営のラウンドテーブルの様子です。院生が、参会者のご意見に答える形で、シンポジウムやポスターセッションでの協議内容を受け、自身の研究について補足説明を行っています。

下の写真もラウンドテーブルの様子です。議論が深まる中、にこやかな表情でそれぞれの実践を語り合う姿が見られました。

院生一人一人の胸には、何とか中間報告会まで来れ、やり終えることのできた安堵感と少しの自信、そして在籍校の先生方や学び合う仲間への信頼と感謝の念がありました。



### 【編集後記】

協創第2号は、中間報告会の特集を組みました。発刊に当たり、新潟県教育委員会教育長池田幸博様、新潟市教育委員会教育長前田秀子様よりご挨拶のお言葉を賜うことができ、本教職大学院にとって大変励みになりました。この場をお借りしまして御礼を申し上げます。

スタートしたばかりの本教職大学院ですが、第1期生の学びは、在籍校の課題を踏まえながら、様々な協働の学びを通して徐々に深まりを見せています。

私たち専任教員もチームを組み、院生の学びを支え、師弟同行頑張ります。(吉澤)

参会者アンケートには、「大学院での学び方や院生の研究ややる気が分かり、参加してよかった」という声が見られました。

また、新潟日報の記事にあるように、「忙しい現場だからこそほかの教員が立ち止まって考えるきっかけになっている」という在籍校で学ぶという本教育大学院のシステムに対する肯定的評価をいただきました。

館岡院生は、中間発表会を終えた課題研究で次のように話しています。

「学びながら研究を進められるのは、在籍校の校長先生はじめ、職員から支えられているから。地域連携に焦点を当てた研究が成り立つためには、先生や地域の方々との協働が不可欠。また、大学院での授業を通して、様々な視点から子供の実態をとらえたり、多角的に教育をとらえたりすることができるのも自分の課題研究に直結する。在籍校に少しでも貢献できるような研究となるようしっかり考えていきたい。」

これからの院生一人一人の学びの深まりに期待が持てます。



(勢揃い 中間報告会を終えて)

※ 中間発表会のプログラム「教職大学院での学びの流れについての説明」は、教職大学院HPに資料を掲載しております。そちらをご覧ください。

### 次号の予告 特集「授業」

教職大学院で行われている授業を、担当の教員と受講している院生が紹介します。

平成28年度「にいがた教育フォーラム2016冬の陣」(成果報告会)

開催日時：平成29年3月4日(土)9時30分開始予定

内容：基調講演 義本博司様(文部科学省大臣官房審議官〔高等教育局担当〕)

シンポジウム/ポスターセッション/ラウンドテーブル

情報交換会・懇親会

\* 詳細は後日、下記HPにてお知らせいたします。



新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第2号 2016.9.30 発行

編集・発行・印刷

新潟大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻(教職大学院)広報部会

〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050

問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp

ホームページ URL: <http://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>

ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。